

ふるさとの民話 (第五十四話)

『薬師の湯』

昔、堂ヶ谷内の丘に「薬師堂」があった。(現今、その跡に礎石や石碑がある。) その傍に、細々した湯が湧いていた。八田村の人たちは、いつも、その温かい泉を大事にしていた。村人たちは、その湯につかり、春や夏には、農作業の疲れをいやし、また、冬には鞭やしもやけの治療をしていた。



ある寒い日、他所の女房たちが寄ってきて、その泉に汚れ物を洗って帰った。ところが、その日から、泉の湯は、一滴も出なくなり、端村の和倉に湯が湧きだした。八田村の人たちは、湯が出なくなったけれど、その後、あかぎれやしもやけにかかる者もなく、健康で美人ばかりいる村となった。

(八田町 伝承 山下郁雄 集録)

→